

「ただ、わたしの名のために」

マルコによる福音書9章33-41節

森島 牧人 牧師

今日もマルコ福音書を読んで参りましょう。主イエスは神の国の福音を宣べ伝えるために来られましたが、それは場所や建物を定め、対象を定めてのものではありませんでした。初期の教会も同じで、形にこだわらない運動体としての活動であったと思われます。主イエスは、福音の教を静かな瞑想の場ではなく、具体的な人間の生活のただ中で語り、与えられたのです。今日の教えも、旅の途上での弟子たちの議論をきっかけとしています。

聖書には、「一行はカファルナウムに来た。家に着いてから、主イエスは弟子たちに、『途中で何を議論していたのか』とお尋ねになった。彼らは黙っていた。途中で、だれがいちばん偉いかと、議論し合っていたからである。」(マルコ9:33-34)とあります。カファルナウムに到着し、多分ペトロの家でみんなで休んでいる時だったでしょう。主イエスの問いに弟子たちは黙っていたとあります。緊張を強いられた辺境の地への険しい長旅を終えた弟子たちにとって、故郷カファルナウムへの道は危機感もなく心む道程でした。その道すがら、彼らは「だれがいちばん偉いか」ということで議論していたのです。この場合の「議論」とは大声の議論ではなく内緒話に近い意味で、主に聞こえないようひそひそと口論していたのです。その口論に突然、主が入って来られたのです。私たちはさまざまに体を動かして生きているその中で突然主イエスと出会い、御言葉を聞きます。女が主イエスの衣にかすかに触れたその一点と同じように、小さな名もない者が、その生きている場所で不意に主に触れたその一瞬の閃光が、その人のその後の人生を変えて行くのです。

さて今日の弟子たちの議論、それは席順を争うという、主の弟子にはふさわしくないものでした。この後に続くヨハネやペトロの言葉の中に、彼らの「自分たちは特別だ」という思いがはっきりと見えます。石川啄木の歌集「一握の砂」の中に、「友がみなわれよりえらく見ゆる日よ 花を買ひ来て妻としたしむ」という歌がありますが、人間は大なり小なり競争心や権力への意識を持っています。ペトロ、ヨハネ、ヤコブを始めとする最初の教会を形成する弟子たちが主イエスと生活を共にし教えを受けたにもかかわらず、かつての彼らと全く変わっていなかったのです。弟子たちを叱責された主は、偉くなることを否定されるというより、自分を偉いと思う人間の心に生じるさまざまな問題点を指摘されたのです。

十二弟子を呼び寄せて主イエスが言われたのは「いちばん上になりたい者はみんなのいちばん下になれ。みんなの召使になれ。」(同9:35)というものでした。これは私の好きな塚本虎二の訳ですが、弟子たちにとってこの言葉は衝撃的なものでした。この主の破壊的ともいえる言葉を通して聖書が教えるのは、視点の移動ということです。自分が自分がという上に向けられた視点を、みんなのためにという全く異なる視点へ移す。下にいた私たちが主によって受け入れられ、その主イエスご自身が誰よりも下になり召使になり給うたのだったという視点を私たちが持つ、それこそが聖書の求めているものなのです。

私たち人間は、自分より劣った者を見下すという生来傲慢で排他的な存在です。私だけでなく隣人のためにも死なれた主イエスは、そのような私たちに向かって子供を抱き上げ、「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」(同9:37)と言われたのです。

大切なのは「受け入れる」ということです。主が、すべての人を受け入れてくださったように、私たちも欠点のある弱い人を受け入れる・・・「ただ、わたしの名のために」と言われる、主とその主に抱かれた幼子とを思い出しながら。

(説教要約 羽入田悦子)